

# 中学校音楽科

「主体的・対話的で深い学び」の実現に向けた授業づくり



## 表現領域における音楽活動 Q & A

中学校音楽科における「主体的・対話的で深い学び」の実現に向けた授業づくりに当たって、表現領域における音楽活動について、Q & Aにまとめました。

日々の授業づくりに御活用ください。

表現領域における音楽活動を行うためには、音楽科における「知識」の理解と、「技能」である歌唱（歌を歌う）の技能、器楽（楽器を演奏する）の技能、創作（音楽をつくる）の技能の習得が必要となります。そのためには、音楽活動を学びにつながる意味ある活動として授業に位置付けることが大切です。

「[授業づくりQ & A](#)」, 「[中学校音楽科における『技能』](#)」と併せて御活用ください。



### Q1 生徒が安心して歌唱の活動に取り組むことができるポイントはどのようなものですか。

A

表現領域の中でも歌唱の活動は、特に気持ちや雰囲気左右される面があります。歌唱の活動を行う目的や場面に応じて、生徒の学習状況や実態を把握し、他者との適切な距離感で歌うことができるようにするなど、学習形態あるいは活動の隊形を工夫して環境を整えることがポイントです。また、歌唱の活動の際に、教師は、生徒全員の表情が見える位置にいることを心掛け、生徒にとって安心して一緒に歌うことができる、自分の声を聴いてもらうことができる存在となることもポイントです。

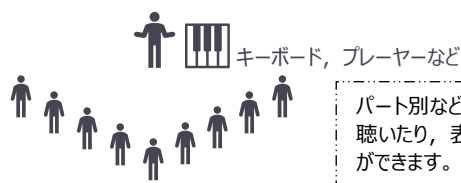
[「授業づくりQ&A」Q9へ](#)

例えば、斉唱をする場面と合唱をする場面では、歌唱する隊形が異なります。教材曲の旋律や音程を覚えようとする場面では、一人一人の距離がある程度離れている方がよいときもあります。隊形の例とその目的を、以下に示します。

#### ♪ 個人やパートなどの活動の場面

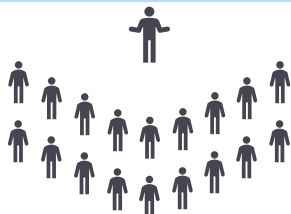


教師や又はパートなどのリーダーを中心に、声を聴きながらアドバイスをしたり、一緒に歌ったりすることができます。

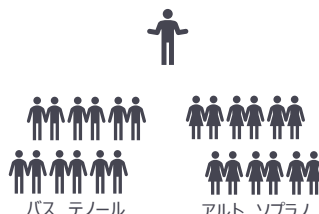


パート別などの活動の際に、互いの声を聴いたり、表情を見たりしながら歌うことができます。

#### ♪ 他者と合わせて歌う活動の場面



互いの声が響き合うため、よく聴き合いながら歌うことができます。



教師又はパートなどのリーダーを中心に、一体感をもって歌うことができます。

【清水宏美著「これでできる！音楽科の授業創り」pp. 24-25 を基に作成】

歌唱の活動を行う目的や場面に応じて、学習形態あるいは活動の隊形を工夫し、生徒が安心して歌唱の活動に取り組むことができるようにすることが大切です。

歌唱の活動を行うに当たって、歌唱の活動に必要な不可欠な「声」は、いつでも、どこでも、誰とでも音楽を奏でることができる特徴があることについて、生徒に伝えることが大切です。また、変声期の生徒に対して丁寧な指導が求められます。詳細は、[中学校学習指導要領（平成29年告示）解説 音楽編（以下、解説）p.109](#)で御確認ください。



## Q2 音を取ることが難しい生徒への指導のポイントはどのようなものですか。

A

生徒が「歌うことって楽しいな」、「もっと歌ってみたいな」などと歌唱の活動の楽しさを体験できるようにすることがポイントです。

音を取ることが難しい生徒は、歌うことに対して自信がない状況であることが考えられます。このような場合、教師がある音高の声を出し、生徒が同じ音高の声を出す、といった、歌を歌う際の基礎となる、歌唱の活動そのものを成立させるための技能が必要となります。

📍 [「中学校音楽科における『技能』」](#)へ

音を取ることが難しい生徒への指導の例を、以下に示します。

### ♪ まずは「声」を出すことに慣れる

「声を出しましょう」と言っても、会話をするための「声」と歌唱の活動に必要な「声」は異なります。歌唱の活動に必要な「声」を出すことに慣れるようにすることがポイントです。そのためには、Q1のように学習形態や活動の隊形を工夫して、生徒が安心して歌唱の活動に取り組むことができるようにしたり、歌唱が苦手な生徒の気持ちや変声期の生徒に対して配慮したりするなどして、少しでも「声」を出すことができるようにしましょう。



### ♪ 聴きながら音を取る

生徒の音域に合わせて、生徒が出しやすい発声で、教師が示した音高の声とともに、その音から音域を広げていくことがポイントです。その際、ハミングや母音で発声して響く位置を確認したり、耳に手を当て、自分の声を聴きながら発声して確認したりするなどの指導が考えられます。また、1人1台端末を活用して録音又は録画したり、範唱などの音源を聴いたりしながら歌う機会を設定することも効果的です。



### ♪ 体を使って歌う

音を取ることが難しい要因として、音高が分からないだけでなく、リズムが取れないことが原因で音高が外れてしまうことも考えられます。その際、体を使って歌唱の活動に取り組むようにすることがポイントです。音高が分からない場合の指導として、音高の動きを手で示しながら歌うハンドサインを取り入れることが挙げられます。リズムが取れないことが原因で音高が外れてしまう場合の指導として、リズムを手拍子で表したり、リズム唱をしたりすることが挙げられます。ハンドサインなど体を使って音を取ることができるようになることは、音楽自体を感性で捉え、音楽の構造を理解したり表現力を高めたりすることにもつながります。



【大熊信彦・酒井美恵子編著「中学校音楽科教師のための授業づくりスキル」を基に作成】

解説 p.41 では、「……技能に関する指導を単独で行うことに終始することのないよう留意する必要がある。」と示されていますが、技能に関する指導を単独で行ってはいけないということを示している訳ではありません。表現領域における音楽活動では、当然、技能に関する指導を単独で行う場面があります。その技能の習得には、ある程度の時間や繰り返しの練習が必要となりますので、その際、生徒の思いや意図との関わりを捉えられるようにしながら指導を行うことが大切です。技能に関する指導を単独で行う場面のみで終わることがないように留意しましょう。

【「教育音楽 中学・高校版」2024年1月号を基に作成】



## Q3 読譜の指導のポイントはどのようなものですか。

A

読譜については、生徒が生涯にわたって音楽を楽しむために、無理のない程度と方法で慣れさせることがポイントです。

解説 pp.112-113 では、以下のように示されています。

(5) 読譜の指導に当たっては、小学校における学習を踏まえ、 $\sharp$ や $\flat$ の調号としての意味を理解させるとともに、3学年間を通じて、 $1\sharp$ 、 $1\flat$ 程度をもった調号の楽譜の視唱や視奏に慣れさせるようにすること。

……読譜については、生徒が生涯にわたって音楽を楽しむために、無理のない程度と方法で慣れさせることが大切である。無理のない程度と方法を見いだすためには、生徒の実態を把握することが大切である。生徒の実態を把握した上で、小学校音楽科における読譜に関する学習との関連を図った指導を工夫することが求められる。

この内容を踏まえ、読譜の指導のポイントについて、以下に示します。

### ♪ 生徒の実態を把握する

読譜における生徒の実態は、学校外での習い事で読譜に慣れている生徒、これまでの授業で学習していても読譜を苦手と感じている生徒など、様々です。生徒の実態を把握するために、例えば、「ハ長調の主音（ド）の位置が分かる」「楽譜を階名で読むことができる」「音高とリズムを把握して、階名唱をすることができる」など、簡単なアンケートやチェックリストなどを作成し、活用することが考えられます。

なお、簡単なアンケートやチェックリストなどを作成する際は、小学校音楽科における学習を踏まえることが大切です。小学校学習指導要領（平成29年告示）解説 音楽編の内容を、歌唱分野を例に示します。

#### 【第3学年及び第4学年の内容】

##### A表現

(1) 歌唱の活動を通して、次の事項を身に付けることができるよう指導する。

ウ 思いや意図に合った表現をするために必要な次の(ア)から(ウ)までの技能を身に付けること。

(ア) 範唱を聴いたり、ハ長調の楽譜を見たりして歌う技能

#### 【第5学年及び第6学年の内容】

##### A表現

(1) 歌唱の活動を通して、次の事項を身に付けることができるよう指導する。

ウ 思いや意図に合った表現をするために必要な次の(ア)から(ウ)までの技能を身に付けること。

(ア) 範唱を聴いたり、ハ長調及びイ短調の楽譜を見たりして歌う技能

【小学校学習指導要領（平成29年告示）解説 音楽編 p.58, 87を基に作成】



### ♪ 生徒の実態に合わせた指導を工夫する

把握した生徒の実態を踏まえ、生徒の実態に合わせた指導を工夫することが大切です。器楽分野のリコーダーの学習においては、例えば、ハ長調の「ドレミファソラシド」を全ての音を提示して指導するのではなく、実態に応じて、「ドレミ」、「ドレミファソ」などと3音や5音を提示して指導することが考えられます。また、教材曲の楽譜とリコーダーの運指を一体化させたプリントを作成して活用することも考えられます。

### ♪ 読譜の方法を使い分ける

読譜の方法には、移動ドと固定ドがあります。解説 p. 109 では、歌唱の指導において、「相対的な音程感覚などを育てるために、適宜、移動ド唱法を用いること」と示されていることから、適切な教材において効果的に用いることが重要です。また、移動ド唱法を用いて、楽譜を見て音高等を適切に歌う活動を通じて、相対的な音程感覚を育てるだけではなく、歌唱における読譜力を伸ばすとともに、音と音のつながり方を捉えて、フレーズなどを意識して表現する力を養うこともできると考えられます。

器楽分野の指導においては、生徒の実態や必要に応じて、固定ド唱法を用いるとよいです。

「夏の思い出」は二長調だから、  
移動ド唱法で階名唱をしてみよう



### ♪ 「歌う」活動を取り入れる

楽譜に「ドレミ…」と階名を書くことができるようになるだけでなく、その教材曲をしっかりと歌い、教材曲に親しむことが大切です。例えば、歌唱の教材曲の場合、まずは歌詞で歌い、その後、移動ド唱法などの階名唱で歌うことが考えられます。その際、拡大した楽譜を黒板に貼ったり、大型提示装置で楽譜を提示したりするなどして、楽譜のどの部分を歌っているのか示すなどの工夫をすると、より効果的です。器楽の教材曲の場合も、固定ド唱法などの階名唱で歌い、その後、楽器の運指と一致できるように工夫をすると、生徒自ら楽譜を読みながら演奏できるようになります。

【大熊信彦・酒井美恵子編著「中学校音楽科教師のための授業づくりスキル」を基に作成】

読譜の指導において、例えば、階名唱で歌うことができるようにすることを目的とした指導に終始することがないように留意しましょう。「読譜は、音楽をより深く理解し、豊かな表現をしたり、深く聴き味わったりするために役立つ」ということに気付くことができるようにしたり、「楽譜を読むことができるようになりたい」という生徒の思いや意欲をもつことができるようにしながら、指導を行う配慮が大切となります。解説では、「慣れさせるようにする」という示しであることから、生徒にとって無理のない程度と方法で指導を行う必要があります。

【副島和久編著「新学習指導要領の展開」を基に作成】



## Q4 生徒が意欲的に音楽活動に取り組むポイントはどのようなものですか。

A

生徒に対して、音楽活動に取り組む目的やねらい、音楽活動に取り組むことで身に付けることができる資質・能力などについて、教師が明確に伝え、その場にふさわしい声掛けをすることがポイントです。

生徒が意欲的に音楽活動に取り組むためには、まずは、生徒が意欲的に学習に取り組みたくなる題材をデザインすることが大切です。その際、題材全体を見通して「主体的・対話的で深い学び」の実現を目指した授業改善の視点で題材をデザインしましょう。

👉「授業づくりQ&A」はじめに、Q6へ

題材をデザインすることに加え、指導のポイントについて、以下に示します。

### ♪ 学習の見通しをもつことができるようにする

生徒に学習の見通しをもたせることは、生徒が授業を通して音楽を学習する意味を理解することへつながります。

👉「授業づくりQ&A」Q8へ

音楽科の学習では、音楽活動に取り組む場面が多々ありますので、音楽活動に取り組む目的やねらい、音楽活動に取り組むことでどのような力を身に付けることができるのかなどについて、教師が明確に伝えることで、生徒が意欲的に音楽活動に取り組むことにつながります。どのような場面で、どのように伝えるかについては、生徒の学習状況を把握し、それにふさわしい伝え方や提示の方法を工夫することがポイントです。

また、音楽活動に主体的に取り組むことができるように、黒板やワークシートに「こんなときどうする？」など、どのように音楽活動に取り組んだらよいかということを示すことも効果的です。

👉令和5年度プロジェクト研究（中学校音楽科教育研究委員会）「事例1」へ

### ♪ 声掛けを工夫する

音楽活動に取り組んでいる生徒にとって、今の状況が、音楽活動に取り組む目的やねらいに沿っているのか、音楽活動に取り組むことで必要な資質・能力を身に付けることができているのかなどについて、生徒自身で判断することが難しいと考えられます。1人1台端末の録音又は録画機能を活用して確認することができますが、教師が的確に助言や指摘などの声掛けをすることが効果的です。

#### 🎵 具体的に伝える

声掛けをする際は、具体的に内容を伝えることがポイントです。そのことに加え、音楽を歌って確かめたり、聴いて確かめたりすると、より効果的です。

口の開け方が素晴らしいね。  
素敵な響きの声で歌えているね。



上手に歌えているね。

#### 🎵 改善方法や課題を伝える

思うように音楽活動に取り組むことができていない生徒に対して、まず、できていることとできていないことを自覚できるようにすることが必要です。次に、できないことの原因を見付け、具体的な内容で生徒が取り組みやすい改善方法を伝えることがポイントです。改善方法について、教師が生徒と一緒に考えることで、今後の音楽活動において、生徒が自身の新たな課題に気付き、改善しようとする意欲につなげることができます。

ドの音はきれいに出来るけど、  
低いソの音は裏返ってしまいます。



息の強さはどうか？  
リコーダーの穴を塞いで  
いるかな？

低いソの音だけ吹いてみると  
どうなるかな？

リコーダーの穴は塞ぐことができているね。  
息の強さをいろいろと試してみよう。

【白井学編著「中学校音楽 指導スキル大全」を基に作成】

小学校、中学校、高等学校における音楽の学習は、音楽活動を通して行われることが前提です。このことは、教科の目標に「表現及び鑑賞の幅広い活動を通して」（中学校）などのように示されています。題材をデザインするに当たって、「教師が、生徒にとってよい経験になるであろう音楽活動を設定し、その活動を生徒に経験することができる場」とするのみではなく、「生徒が、何をどのようにして学ぶのかを考え、そのために必要な活動を設定し、生徒が自ら学んでいくことができる場」とすることがポイントです。生徒にとって意味のある音楽の学習にするために、授業改善は、生徒を主語とすることから始まるともいえます。

【中等教育資料（平成29年5月号）を基に作成】

